

391) ^{しょうがい} ^{ともだち} 生涯の友達

あこのころのわたしには ^{ともだち} 友達はいなかった
学校になじめずに かたすみで泣いていた
唯一の友達は 雨の日に学校の
裏庭でふるえてた チビという犬だった

学校でいじめられ 泣きながら帰るとき
どこからかチビが来て 悲しみを和らげた
連れだって裏山の 公園に登っては
じゃれ合って幸せな ひとときを過ごしてた

そのチビは昨日まで 15年生きていた
苦しい日悲しい日 思い出がよみがえる
チビなしにわたしなど 絶対にありえない
人生で最良の ^{とも} 友達が今旅に出る

わが^{とも}友達よ安らかに この土に眠りたまえ
誰よりも優しくて 誰よりも誠実で
いつの日も信じ合い ^{しょうがい} 生涯をともにした
わがチビよいつまでも 君のこと忘れない

学校の裏山の 思い出がよみがえる
^{しょうがい} ^{ともだち} 生涯の友達は いつの日も君だった